

野球とまちづくり

Baseball and Town Structures

1k03b1200

氏名 高松宏匡

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 間野義之 先生

第1章 研究動機

本研究は、私が今まで13年間取り組んできた野球とこれから就職する不動産業とを関連させて行うものである。また、私は札幌出身である。北海道日本ハムファイターズの躍進、北海道内であれば駒澤大学付属苫小牧高等学校の全国優勝で地元の野球人気が高まっていることにも関心がある。日本ハムがどのようにして取り組んで札幌を活性化させたのか、また新たな都市を提案するためにはどんなチームが成功しているのかの指標を、野球とサッカーにおける代表的なチームを事例にして提案したいと思う。

第2章 プロ野球球団の事例

本章においては、北海道日本ハムファイターズ、千葉ロッテマリーンズ、広島東洋カープを事例に挙げた。まず日本ハムは、以前は東京に本拠地を置いていた。札幌に本拠地を置くことによって以前とは違うファンサービスに取り組みを始めた。次に千葉ロッテマリーンズである。地理的に決して恵まれているとはいえない環境の中で、ファンをサポートするように扱ってより一体感を高めることによって足を運んでももらえるようになった。そのきっかけを与えてくれたのはボビー・バレンタイン監督である。チームのサービスは、一度辞任した監督が再び監督となってチームを変えていくことによって変化していく。そして広島東洋カープである。この球団はプロ野球界における元祖地域密着型のチームであったと言える。それは経営のスタイルが地元の企業だけではなく市民の人々がカンパする募金にもあるように苦難を乗り越えたということに起因する。しかし、現在は低迷している。このことはやはり周辺地域の観客を得られていないこと、または地域の働きかけが少ないのではないだろう。

第3章 Jリーグの事例

まずは事例としてコンサドーレ札幌を取り上げた。これは札幌における失敗した事例として取り上げたのである。日本ハムが同じ轍を踏まないようにすることが必要であるので、コンサドーレの欠点を取り上げることにした。次にJリーグでもトップレベルの集客率を誇る浦和レッズの事例を取り上げた。レッズが実際にサポーターを獲得しているのは単にチームを買収して移したからではなく、ヨ

ーロッパのクラブチームを手本にしてサポーターズクラブを設立したことから始まる。サポーターズクラブは公認のサポーターとしての自覚や誇りを持つことを喚起し、より地元を誇りに思うようなチーム作りが進められていった。また、チームは前身の三菱時代からあった後援会の存在をプラスに変えて前者と両方の力をもって地元に関与させてきた。最後にアルビレックス新潟を事例として取り上げた。このチームは、プロリーグ不毛の地である新潟に新たにチームを立ち上げてJ1に昇格した。さらにJ1のトップの集客率を誇っていたアルビレックスは、三位一体の姿勢が貫かれていた。それはまず無料の入場券を計画的に配ることによってスタジアムに足を運んでもらうことから始まった。また、アルビレックスの特徴はサッカーだけにとどまらずにチアリーディングなど他の競技にも参加し、地域総合型としての好例になっている点が新しい。

第4章 新たな都市を高松に求める

前章から考察した結果、本章は下部組織の充実、交通網の整理、周辺地域の人口が挙げられると考えた。

日本にはプロに通じる下部組織というものがない。四国には四国アイランドリーグが存在する。四国には全国制覇をした済美高校など野球熱が特に高い地域であると言われる。その点によって四国アイランドリーグが結成された。筆者は、下部組織として四国アイランドリーグが機能してくれるものだと考えた。そして、それは球場にも反映されてくる。愛媛県の松山市にある坊ちゃんスタジアムと高松市にあるオーリーブスタジアムは収容数が多い。この点からも十分に四国に球団を置くことはメリットがある。また、交通網は瀬戸大橋、高松空港が主要機関である。これらによってファンの流入が容易になり、観客数が多くなる。

周辺地域の人口であるが香川県の人口は100万人、周辺の県の人口も合わせると410万人である。そして岡山県倉敷市と香川県坂出市を結ぶ瀬戸大橋があることによって、野球熱の高い岡山県からのファンの流入が期待できる。これは岡山県にプロ球団がないことから起因する。

まだまだ問題点は山積みであるが、このような点から高松市にプロ球団の本拠地を置くことは、これからの地域密着型のプロ野球界において有意義なものになると考える。